

しいのき

孤高の学者のお顔

名誉館長 三 隅 治 雄



凛として高雅な風貌の学者が、当館の常設展示室に入ると目に止まります。古生物学・考古学・人類学・地質学を広く究めて、明石における人類腰骨の発見をはじめ、わが国人類史の解明に貢献した直良信夫博士（1902～85）の真影です。

博士は、1932年に中野区松が丘一丁目に居を構え、以采、41年間、早稲田大学を学究の拠点としながら、真摯な研究生活を送りました。1937年、江古田一丁目の大橋・東橋付近の工事現場から、縄文時代の広葉樹・落葉樹の植物化石と、その下の旧石器時代の土層から針葉樹の化石を発見してわが国に氷河期のあったことを証明し、また、1954年、江古田三丁目のアパート建設地から旧石器時代の稲2粒を発見するなど、日本列島生成の歴史を見直させる大きな研究業績を挙げました。

極貧の少年期から、独学自立して大学教授になるまで、貧乏・無学歴・無学閥ゆえに与えられた軽侮・無視・冷遇にも耐えて、信念を貫き通した博士のお顔の、孤高清冽の表情に、発奮させられるわれわれです。

文化財よもやま話

無にみるコト・オト・ココロ

“文化財”という言葉から、何を連想されるでしょうか？

昭和25（1950）年に制定された「文化保護法」では、有形・無形の文化所産、国民の生活推移の理解に不可欠なもの、遺跡・名勝地・動植物地質鉱物、建造物などにおいて歴史上、学術上、鑑賞上価値の高いものと定義し、それぞれ、有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物、伝統的建造物群と称する、としています。

おわりの通り、文化財は、姿を見て触れられる形ある物＝有形物のみでなく、形としては無くとも歴史の中で確かに生まれ、育まれながら守り伝えられたものも含まれます。演劇・音楽・工芸技術に代表される無形文化財や、生活の中の技術・風俗習慣・民俗芸能に代表される無形民俗文化財がそれで、人間による「わざ」とそれを体得した人々にスポットを当てているのです。初めて芸能・郷土芸能・工芸の分野で無形文化財の指定が行われたのは、ちょうど50年前の昭和27（1952）年3月29日でした。そしてわが中野区にも、文化財保護条例で無形民俗文化財に指定・登録されている江古田御子舞・鷲宮囃子という民俗芸能が、今なお大切にされていることは、ご存知でしょう。

地域に伝わる民俗芸能に目を向け深く追究した本田安次氏（1906～2001）は、沼袋に在住し、日本の民俗芸能研究に大きな足跡を残しました。親交の厚かった三隅治雄当館名誉館長の「見たものをその夜のうちにまとめる姿が印象的だった」との言葉とおり、全国あらゆる地域を積極的に調査し、精密に記録・分析されたその資料は、今ではもう消えてしまった伝承を書き留めていることもあり、地域の財産にとって貴重な役割を果たしています。

この帯は 襦子か 緋子か 縮緬か
さては 鍛子の唐帯にて候

かつて、江古田御子舞には唄があったそうです。動作、声、音曲。人間がもつ豊かな美と感性が放つ一瞬の輝き。形として留まらない故に変化しやすく、また心にも残る「無形」の文化への記憶と語りに触れる機会を大事にしていきたいものです。

大地に眠る歴史

昔の人は遺跡をどう見たか（6）

遺跡から出土する遺物を解釈した昔の人としては、石器について太古の人工品という見解を示した新井白石が有名ですが、今回はさらに石器の研究を深めた人物として、木内石亭（1725～1808）を紹介しします。

木内は近江国（滋賀県）に生れ、土地の素封家の跡取りとなりました。幼いころから変わった形の石を好み、その趣味は大人になってさらに徹底されていきます。自ら各地をまわって奇石の収集にはげみました。ついには、それにあきたらず「弄石社」なるサークルをつくり同好の志を集い、変な石の情報を集めては発表し合うといった活動を展開していました。その会員は、東北から九州まで、ほぼ全国にわたっていたといえます。



これだけだと、単なる変なおじさんですが、彼は収集された膨大な石の中に石器があることを認識し、それに関して鋭い見識を披露しました。また、主宰する『国史大辞典』吉川弘文館より「弄石社」の活動が全国ネットにわたり、情報交換を展開した点が、学会の萌芽ともいべき役割を果たしたとして、現在、高い評価が与えられています。

特に石器の分析は、製作技術にかき肌とみがき肌があることを指摘しています。これは今でいう打製石器と磨製石器の分別です。そして発見地を重要視し、石器がある場所には必ず土器も採集できることを観察しています。これは遺跡という概念を彼がすでに持っていたことを示しています。

さらに石器の年代についても「今より七八千年程も昔と思召せ」と述べている点などに、当時にはない優れた歴史感覚を見ることがができます。主要著作にはスケッチを中心にして様々な奇石を解説した『雲根志』があります。

コレクションの趣味が、後世の人々になんらか寄与することができた、稀な例といえましょう。

＝特集＝

なおらのぶお

学問の巨人直良信夫

なおらのぶお
直良信夫は、膨大な研究を続けながら、その評価は遅れがちでした。直良は中野区内で生涯の大半の研究を成し、区内からも貴重な発見をしています。今年は、その生誕百年にあたります。これを記念し、特集として、中野で発見した化石とそれが伝える意味を中心に、直良の業績と中野との関係などについて紹介します。



常設展示室 直良コーナー

明石原人骨の行く末

昭和2年頃から、直良は明石の西八木海岸の断崖で化石採集をはじめました。この断崖はナウマン象など様々な化石が包含されており、ここを訪れるのは静養中の直良にとって唯一の楽しみでもあったのです。昭和6年4月18日、その後の学会を揺るがす大発見をすることになります。断崖の灰色粘土層の中から人類の腰骨を見つけたのです。化石の研究をはじめていた直良は、これを旧石器時代の人類の骨と直感しました。当時の日本では、旧石器時代には人類は生息していなかったとするのが定説でした。もし人骨であれば大変な発見です。直良はこれを鑑定してもらおうべく東京帝国大学の松村^{あきら}博士に送りました。返事は太古の人類の骨ということでした。新聞誌上に大々的に報道され、直良の名前は全国的に有名になりました。

しかし、松村博士の次の手紙は、ヨーロッパの例からは腰骨の発見はなく比較材料がないため判断はできないという最初の返事とはまったく逆の結論でした。

直良は、世間から、功名心だけのたらめ山師という罵声を浴びせられることになったのです。

昭和7年、傷心の直良はきちんとした勉強をす



明石原人発見の地 明石市西八木海岸(昭和6年)
〔直良三樹子『見果てぬ夢明石原人』より〕

明石までの生い立ち

直良は、明治35年1月1日大分県臼杵に没落武士の次男として生まれました。生活はたいへん苦しく、少年時代から活版所や本屋へ勤めながら勉学に励み、学業は極めて優秀でした。大正6年に上京して鉄道院上野保線事務所の給仕として就職、夜間は岩倉鉄道学校に通いました。卒業後、農商務省臨時窒素研究所所員となり、研究所の近くを散策中に貝塚を見つけ考古学を知ることになります。大正11～12年には、採集された土器を研究所に持ち込み粘土原料の分析を試みました。現在では胎土分析として一般化している方法の先駆ともなる業績でした。しかし、大正12年に結核をわずらい職を辞し、療養生活を余儀なくされ、姫路・別府を経て明石に静養の地を定めました。

直良の人生に数奇な運命を与える発見をしたのは、この明石でした。

るため再び上京し、中野区江古田（現在の松が丘一丁目）に居を構え、かねてから親交のあった早稲田大学の徳永重康博士の個人助手となりました。

ここで、化石獣骨の徹底的な研究をすることになったのです。件の明石原人骨は、江古田の邸宅の一階に紙箱に入れられ大切に保管されていましたが、昭和20年5月25日の東京大空襲によって残念ながら灰燼に帰してしまいました。その時の落胆について、のちに直良は「骨は跡形もありませんでした。やっぱり運がなかったんだなあ。その時、そう思ったことでした。」と語っています。

この世から消滅してしまったと思われていた原人骨が再び脚光を浴びることになったのは昭和23年のことでした。東京大学の長谷部言人教授がその骨を原人と認め「ニボナントロプス・アカシエンシス」と学名をつけたのです。「明石原人」の誕生です。焼失したはずの骨がなぜ研究の俎上に乗ったのでしょうか。実は、先に述べた松村博士が石膏の模型を製作して保存していたのです。博士の見解の変化は、当時の上からの圧力によるものであったことがこの時はじめて明らかになったのです。

しかし、昭和57年に同じ東京大学の研究者らによって縄文時代から現代までの時代の人骨という新説が出され、原人説は再び否定されました。

現在でも、この骨が原人なのかそうでないのか厳密な意味での決着はついていません。

松本清張の小説「石の骨」は直良をモデルとしたもので、登場人物の名は違うもののほぼ事実が描かれています。のちに直良は語っています。

「何人かの小説家が話しを聞かせてくれとってきました。わたしは断りました。貧しく、そして学歴がないばかりに、私が今までどれほど馬鹿にされて悲しい思いをしたか、それはいくら言っても言いつくせません。」と。

江古田植物化石層の発見

このような状況の中で、直良みずから「私が、学会にささやかでも貢献できたと自信をもって言える仕事の一つ」と語っているのは、江古田植物化石層の発見です。

昭和12年の春、現在の江古田一丁目の大橋・東横付近で水道管敷設工事が行われていました。直良は掘り上げられた土の中に、化石化した松ボツ



直良信夫博士採集植物化石

クリなどの植物化石を発見したのです。その後、毎日のようにこの付近で資料採集をつづけました。

この江古田植物化石層は、妙正寺川と江古田川流域一帯に認められる、深さ約2mの土層です。

縄文土器が含まれる土層中には、オニグルミ、トチノキ、ハシバミ、エゴノキ、ハンノキ、カシ、コナラ、ススキなど、広葉樹・落葉樹の化石が認められ、その下の旧石器時代の土層では、イラモミ、カラマツ、コメツガ、チョウセンゴヨウといった針葉樹が発見されています。



12000年前の江古田の森（イメージ）

縄文時代の土層中から発見された植物は現在の中野・東京に生えているものと同一ですが、旧石器時代の土層中のものは、亜高山性の植物で海拔1500m以上にしか認められないものでした。このことは、今から約12000年前のこの地域の気候風土は、気温は現在より5～10度低く、景観は日光戦場ヶ原や青森の八甲田山のような深山であったことが判明したのです。さらに重要なことは、当時、日本列島は地球の北半球全体に起こった氷河期とは無関係であったと考えられていたのが、この発見によって少なくとも最終氷河期は世界の動向と同じであったことが証明されたことです。

直良は語ります。「当時の妙正寺川は、美しい川であった。水はすみわたり、フナやクチボソが

よく釣れ、秋にはカモが河畔に飛んできたりした。

この発見の感動は、私の心の中で今も、かつての妙正寺川の水のように清冽に流れつづけている。だが、現在の妙正寺川は、工場や住宅の建設によって、ただの都会のドブ川に変わりましてしまった。」

旧石器時代の稲

直良は江古田ばかりでなく、沼袋・野方・鷺宮・中野駅周辺といった工事現場から植物化石層を採集して研究を続けていました。最初の発見から20年近くがたった頃、また一つ、江古田植物化石層から重要な発見がありました。それは旧石器時代の稲の発見です。

昭和29年暮れに、江古田三丁目の都営江古田アパートの建設地で地質調査をしていたところを直良が通りかかり、そこから化石が含まれている土層をリヤカー一杯分もらいうけました。中から2粒の稲が検出されたのです。形状は長粒米で、現在日本で作られている米とは違ったものでした。

この化石はもちろん栽培されたものではなく、水田農耕の伝来以前の野生の稲です。長粒米は元来、熱帯地の沼地に生えるもので、氷河期以前に暖かい気候状態があったことを示しています。直良は、当時



旧石器時代の稲

日本中に生息していたナウマン象の餌になっていたものと推測しています。

さらに、当時書き進めていた「日本農業発達史」という論文にさっそく、この調査データを書き加えました。この論文は、学位論文として早稲田大学文学部で受理され、昭和32年7月に同大学から文学博士号を受けました。

昭和35年に早稲田大学教授になり、直良は58歳にしてようやく穏やかな日々を手に入れることができました。昭和47年に定年、翌年、体調を崩し胃癌の手術をしたのをきっかけに、41年間住んだ中野区江古田を離れ、妻の故郷の島根県に隠退することになりました。そして昭和60年11月2日、考古学・古人類学・古生物学・地質学のすべてを究めた「最後の博物学者直良信夫」は83歳の生涯を閉じました。採集された膨大な資料は現在国立歴史民俗博物館に収められています。

子供達のために

直良は、学術研究を進める一方で、子供向けの著作も沢山残しています。これらは、昭和17年から20年代頃がもっとも多く、定職らしい職のなかった直良にとっては、戦中から戦後を生きていくための生活の糧ではありましたが、その内容は非常に優れたものと評価されています。「子供の歳時記」「三光鳥の鳴く朝」「モズの生活」「私達の祖先の話」「地形と生物のおいたち」などの著作があります。その他に子供用の百科事典や雑誌などにも沢山の原稿を寄せています。

生活のめどがたったのちも直良は「子供のおやつになる本を書く」といった姿勢を崩さず、やさしい筆致の単行本を書き続けました。



『子供の歳時記』(昭和17年)、『中野の生いたち』(昭和44年)

直良博士と中野

直良は昭和7年から41年間にわたって中野区に住んでいましたが、区との直接的な関係は、昭和34年の中野区考古資料館建設委員会の発足に伴い、その委員に就任したことから始まります。そして昭和37年に中野区史料館が開館しました。直良は史料館運営委員に就任すると同時に区内の文化財保護に関して尽力することになりました。

中野区史料館は、中野文化センター郷土史料室を経て中野区立歴史民俗資料館に発展しています。



関東ローム層中の石器

直良博士手作りの標本

現在、歴史民俗資料館の常設展示室に展示されている江古田植物化石の標本は、直良みずからが、箱を用意し、典型的な化石を並べ、直筆のカードを添えたものです。そのほかに、関東ローム層の中に黒耀石の石器がしっかりと入りこんだ旧石器時代の石器標本は、直良ならではの視点に基づきわめて貴重なものと言えます。それは、明石原人骨が発見されたとき、あまりの喜びのためうかつにも附着していた土の部分を洗い流してしまったという苦い経験から出た、実証的な標本保存の姿勢です。その時、発見そのままの状態で明石原人骨が保管されていれば、その土層の研究によって、その後の展開はずいぶん変わったものになっていたことでしょう。



中野刑務所内調査を指導する直良博士

区はじめての発掘調査

昭和39年1月に、中野区教育委員会は直良を調査責任者として中野刑務所内で弥生時代の火災住居跡を発掘調査しました。区で行った最初の本格的な学術発掘調査です。この時は住居跡1軒の調査でしたが、直良の研究により建築材にはクリ・シラガシ・カシワが使用されていたことが判明しました。また、注目されたのは、ススキの炭化物が住居内に発見されたことです。ススキは日の当たる土地に成育することから、その存在は森林が切り開かれた証しともいえるものです。直良はこの時すでにこの地域が開拓され広い集落が存在していた可能性を示唆されたのです。それは、その後この地で平和の森公園・新井三丁目遺跡といった都内屈指の大集落が調査されたことによって、証明されています。

愛する中野へのメッセージ

直良は長年住んでいた中野をこよなく愛していました。しかし、戦後の急展開の景観の変化は、直良にとって憂えるべきことでした。昭和44年中野区史料館資料叢書第5号（中野区教育委員会刊）として「東京都中野のおいたち」という一冊を書かれています。その最後の一文をここに紹介してこの特集を終りといたします。

「古い中野が、無惨にもたたきつぶされ、よしあしのみさかきもなく、きみょうな生活風景が開かれるようなことになってしまいました。私はけって、感傷的な懐古趣味をかきたてて、中野の昔をなつかしんでいるものではありません。

（中略）人間が平和で幸福に暮してゆくためには、何よりも社会をよくし、その社会での人間としての生活を充実させることにあります。（中略）そのような人間生活の心の支柱には、自分の住んでいる土地を、こよなく愛するまごころがなくてはなりません。その心の糧に、もしもこの私のつたない一文が、役立つようなことがありましたならば、私はほんとうに、うれしく感じます。いやむしろそういうことを願ってこの一文を草したのです。」

直良の思いは今、中野区立歴史民俗資料館の中に生き続けています。



中野の原風景（昭和9年鷲宮）

【参考文献】

- 直良信夫 1942『子供の歳時記』葦牙書房
- 直良信夫 1969『東京都中野の生い立ち』中野区史料館 資料叢書第5号 中野区教育委員会
- 直良信夫 1976『峠と人生』NHKブックス
- 直良信夫 1981『学問への情熱』俊成出版社
- 直良三樹子 1995『見果てぬ夢「明石原人」』時事通信社
- 高橋 徹 1977『明石原人の発見』朝日新聞社
- 玉利 勲 1985『古代日本の発掘発見物語』国土社
- 春成秀爾 1994『「明石原人」とは何であったか』NHKブックス

古文書つづり

電子的媒体もいづれ「古文書」に

資料館にはさまざまな資料があり、「古文書」もその一つです。これは差出人(作成者)から受取者へ意思・用件を伝達するために作成され今日その効力を失ったものなどと定義され、他に日記・メモなど受取者のいない「古記録」があって、一般にはこの両者をさして「古文書」といいます。また、類以のものとして書籍や新聞といった出版物(古典籍)があります。

さて、41号・42号でご紹介しましたように、昨年度は企画展「うきしずみ 20世紀一紙とインクで百年間」を企画し、時代を映す鏡として20世紀中に出版された刊行物を展示しました。時期としては明治の終わり頃からということもあり、展示物も私達に身近な新聞・雑誌・図書が中心になります。しかしこうした刊行物は、例えば史料として活用すべき古新聞と単なる古新聞との境目が必ずしも明確でないので「これは史料」と断言

しかねる場合もあり、展示する理論付けに苦心しました。同様に、近年急速に一般化した記録手段である電子媒体も扱いがやっかいなものです。会計書類などでは法的にも正式な記録と認められる場合もでてきましたが、史料としての在り方に関する共通理解は未だありません。

史料を体系だてて把握するための学問が古文書学・古記録学なので、当然こうしたものも分類し理解できる新たな古文書学が必要だと思えます。簡単にできることではありませんが、事例を幅広く集めて検討していけば不可能ではないでしょう。

これから先、「古文書」がどのようなものを意味するようになるのか…目が離せません。



◀企画展のチラシ・パンフレット原稿を入稿したCDとこの連載を保存するフロッピーディスク。原稿の他に資料・下書・写真等も含み、記録としての資料的価値をもつ(?)

中野 往来

柴田元泰と林述齋

上高田一丁目に青原寺というお寺があります。江戸時代から赤坂青山北町にあった寺院で、明治42年に現在の地に移って来ました。そこに町医者から幕府の奥医師になった柴田元泰と幕府の儒者で、大学頭を努めた林述齋にかかわりのある貴重な文化財(柴田元泰の墓)が残されています。

柴田元泰は、元文三年(1738)、曾祖父より代々医者之家に生まれました。元泰も江戸で町医者を営み、どんな人に対しても親切で、一生懸命治療してくれるというので、門前に人が群がるほど評判が高かったようです。特に小児科では、江戸一番の名医と言われ、医術に秀でていたので、抜擢され、天明四年(1784)11月に將軍家治に拝謁し、医療のために江戸城に出入りすることを許されました。享和元年(1801)4月には西城奥医となり、さらに同12月16日に法眼の位を与えられました。

一方、林述齋は、美濃岩村藩主松平乗瀧の子と

して生まれ、学問に秀でていたので、林羅山以来、幕府の儒官として学問の事はもちろん、政治上の事にも関連し、代々大学頭を務める林家の七代信敬の養子となりました。述齋は、大学頭になると、寛政の改革にあたり、学問所設置に力を尽くしたり、「徳川実紀」など幕府の編纂事業に携わったりし、林家中興の祖と称せられた人物です。柴田元泰と親交があり、元泰の子、英郷の依頼で、墓碑銘を書いています。その中で、述齋は、「私にも子供が多く十人以上もおり、病気のたびに元泰の診療を受け、お陰で今は立派に成長している。」と書いています。偉人としてではない、述齋と元泰の姿が、連想されるような墓碑銘です。



事業報告

各種事業経過

2001年10月～2002年3月

事業名	内 容	期 間
企 画 展	「うき しずみ20世紀-紙とインクで百年間-」	7/3～12/2
	「おひなさま展」	2/9～3/10
	「秋季所蔵名品展-墨跡の侘」	10/5～12/27
	「冬季所蔵名品展-浮世絵の競演」	1/10～3/31
古文書講座	入門コース 講師：大友一雄氏（国文学研究資料館史料館助教授）	9/22・29 10/6
	講師：笠原 綾氏（日本放送協会学園専任講師）	10/13・20
文化財調査	江古田・沼袋地区民俗調査	継続中
	青梅街道周辺地区民俗調査報告書刊行作業	継続中
埋蔵文化財	上高田五丁目15番民有地試掘調査	10/9～16
	本町五丁目33番民有地立会い調査	10/12
	江原町二丁目21番民有地試掘調査	10/25
	白鷺二丁目48番（南側）民有地試掘調査（国庫補助対象事業）	10/26
	白鷺二丁目48番（北側）民有地試掘調査（国庫補助対象事業）	10/26
	本町二丁目33番民有地立会い調査	11/20
	江古田二丁目12番民有地立会い調査	11/20
	弥生町二丁目47・50番都有地試掘調査	11/27～30
	沼袋一丁目30番民有地立会い調査	12/29
	中野一丁目39番民有地試掘調査（国庫補助対象事業）	12/5
	新井四丁目31番民有地試掘調査（国庫補助対象事業）	1/17
	本町四丁目13番民有地立会い調査	1/25
	江古田三丁目区有地範囲確認調査	3/6・7
	成願寺北遺跡・新井三丁目遺跡遺物整理報告書刊行作業	継続中
そ の 他	区内小学校3学年総合学習見学 26校	10～2月

寄贈資料一覧

2001.5～2002.2
敬称略 受入順

資料名	点数	氏名
卓上ミシン・土産おもちゃ	23点	藤田順子
資料館建設請願書ほか	26点	山崎清司
花嫁衣裳一式	一式	間瀬一夫
木彫像ほか	3点	桜井法子
五月人形段飾り	一式	丸山保育園

木目込み雛人形ほか	一式	寺門勝代
行李(将校用)・綴長バッジ	2点	上村信秀 道子
五月人形(桃太郎)	1点	宗像和男
木製業務用写真機	3台	吉川なか

◎貴重な資料をありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

入館状況

2001年9月～2002年2月（延142日間）（人）

一 般	社教団体	学校教育	合 計
9,539	327	1,272	11,138

発行年月日2002年4月1日

編集・発行  山崎記念
中野区立歴史民俗資料館

〒165-0022 東京都中野区江古田 4-3-4

☎ 03 (3319) 9221 FAX03 (3319) 9119

(印刷物登録番号 13中教社第8号)

(再生紙使用)